
 学 会 記 事

第 59 回新潟画像医学研究会

日 時 平成 20 年 10 月 11 日 (土)
午後 2 時～

会 場 万代シルバーホテル
5 階 万代の間

I. 一 般 演 題

1 乾癬性関節炎を疑った 1 症例

西山 秀昌・新美 奏恵*・田中 礼
新国 農・林 孝文

新潟大学教育研究院医歯学系
顎顔面放射線学分野
同 組織再建口腔外科学分野*

乾癬性関節炎は乾癬患者の約 7% に発症するとされており、顎関節部での発症の報告は極めて少なく、2005 年の時点で 35 例 (E. Dervis ら) と報告されている。今回、両側顎関節に乾癬性関節炎が疑われた症例を経験したため報告する。患者は 36 歳の女性で、乾癬のため皮膚科にて治療中であった。9ヶ月前に大開口後、右側顎関節に疼痛生じ、摂食困難となった。当初顎関節症が疑われたが、CT 検査にて両側下顎頭の著しい吸収と骨増生像が認められ、また MRI 検査にて、両側顎関節に円板転位所見がなく、骨吸収部に面して T2 強調画像上、低信号と高信号の混在する肉芽様の像が認められた。他関節には異常像は認められず、リウマチ因子も陰性であったため、乾癬性関節炎と診断した。顎関節部での骨変化は円板転位に伴う二次的な場合が多いため、円板転位所見がない場合、リウマチ性関節炎や類似疾患が疑われる。今回の症例でも同様の所見を呈しており、重要な所見だと考えられた。

2 唾液分泌低下症の pulse Doppler 所見 — 服用薬剤数との関係 —

勝良 剛詞・斎藤美紀子・伊藤加世子
五十嵐敦子・林 孝文

新潟大学大学院顎顔面放射線学分野

【目的】口腔乾燥を引き起こす可能性のある薬剤の処方数と pulse Doppler 所見との関係を調査し、pulse Doppler 所見と自律神経異常との関係を考察すること。

【方法】対象は唾液分泌低下症患者 67 名。超音波 pulse Doppler にて酸刺激前後の顎下線内の顔面動脈の Vmax の変化を調査した。

【結果】処方薬剤の大部分は抗コリン薬であった。処方薬剤数と唾液分泌量の間、刺激前後の唾液分泌量の変化と Vmax の変化の間に明らかな相関関係は認められなかった。刺激後の Vmax の変化率は処方薬剤数との間に中程度の負の相関が認められ、処方薬剤数が増える程、Vmax の変化率は低下した。

【考察】口腔乾燥を引き起こす可能性のある薬剤の大部分は向精神薬であり、向精神薬が中枢神経での自律神経抑制と唾液腺での自律神経受容体の抑制を行うと考えられることから、低い Vmax 変化率は唾液腺への自律神経伝達異常を示唆している可能性があると考えられた。

3 口腔扁平上皮癌一次治療後の長期経過観察中に顎部リンパ節転移をきたした 2 例

亀田 綾子・Raweevan Arayasantiparb
織田 隆昭・諏江美樹子・佐々木善彦
外山三智雄・羽山 和秀・土持 真

日本歯科大学新潟生命歯学部歯科
放射線学講座

〔症例 1〕65 歳、男性。右側舌癌 (高分化型扁平上皮癌, T1N0M0)。治療前の画像で右側上内深頸領域に 3 × 2 mm 程度の内部均一なリンパ節を認めた。治療後 12 ヶ月の CT で著変なかったが、治療後 20 ヶ月の CT で 20 × 16mm, 内部不均一に造影されるリンパ節を認めた。

〔症例 2〕51 歳、女性。右側舌癌 (高分化型扁平